① 毎月25日発行

山と博物館

第51巻　第9号　2006年9月25日　　市立大町山岳博物館

企画展「ライチョウの生態と飼育」特集号

会期：平成18年10月1日（日）～11月26日（日）

飛翔するオスのライチョウ　　撮影　平瀬貴志

企画展の開催にあたって

市立大町山岳博物館

当館では昭和36年から信州大学などと協力して、北アルプスでのライチョウの生態調査を開始しました。この調査で、なわばりがいつごろから、どのように形成されるのか、つがい期のオスとメスの役割はどうなのかなど、ライチョウの生活が初めて明らかになったことがあります。

また昭和38年からは大町山岳博物館で飼育を始めました。ライチョウの飼育は難しいとされていましたので、当初は繁殖も順調には進まないこともありましたが、孵化日数が23日であることや、ニワトリにとっては軽い病気でもライチョウには深刻な事態になることなどがわかってきました。

平成16年、それまで飼育されてきた最後のオスのライチョウが死亡しました。そこで、今後の山岳博物館のライチョウ保護事業のあり方を専門の先生方に論議していただき、一定の方向性を示していただきましたが、大町市の財政状況などからして、飼育事業を直ちに再開する状況ではないという判断となりました。

近年、南アルプスの北岳周辺ではライチョウの姿が激減してきたのではないかという報告もあります。この様になった要因はまだ明らかにされていませんが、ライチョウは高山で繁殖し、しかも冬になっても里には下りず、通年を高山で過ごす鳥です。このように限られた場所で、約三千羽と限られた数で世代交代をしなければならないライチョウが将来にわたって私たちと共に生きていくには、ライチョウが持っている不思議な面や、まだわかっていないことを知るとともに、生物が生きる環境というものを理解することが大切だと考えます。

企画展「ライチョウの生態と飼育」

市立大町山岳博物館

はじめに

ライチョウは昭和30年に特別天然記念物に指定されました。環境省のレッドリストでは絶滅危惧II類（絶滅の危険が増大している種）にランクされています。

大町山岳博物館では昭和36年から北アルプス爺ヶ岳でライチョウの調査に取り組み、それまであまり知られていなかったライチョウの生活が少しずつ明らかになってきました。昭和38年からは大町山岳博物館で飼育を開始しましたが、飼育が難しい鳥でしたので、一朝一夕には問題が解決しませんでした。

本企画展ではライチョウの生活の概略を解説するとともに、飼育に使用した孵卵器や育雛器などの道具を初めて公開いたします。

企画展を通じてライチョウを理解していただける機会になれば幸いです。

ライチョウの生活

①冬を越したライチョウは（3月上旬ころ）

群れで生活しています。群れもメンバーがはっきりしているわけではなく、群れが合流したり、メンバーが入れかわったりしているようです。群れもオスとメスが一緒のグループ、オスだけのグループ、メスだけのグループとさまざまです。

②にらみ合い（3月中旬ころ）

群れでエサを食べているとき、メス同士が近づきすぎると、首をのばしておどし、エサ場を確保します。

オス同士の場合はもう少しエスカレートしてにらみ合いから追いかけっこになることがあります。しかし、これらは一時的で、すぐに安定した群れになります。

オス同士のにらみ合い（※）

③つつきあい（3月下旬ころ）

エサを食べているオスに尾羽をあげておどしてくるオスがいます。おどしても逃げない場合は、クチバシで相手の体にいどみかかります。しかけられたオスが群れから出るとこの行動は終わりますが、群れの中ではいつまでも続きます。

④順位決め（4月上旬ころ）

群れの中でつつきあいや追いかけっこの回数が増え、つつくオスとつつかれるオスとに分かれてきます。こうしてオスの順位が決まってきます。

メスはにらみあい程度で、オスのような激しい戦いはしません。

⑤なわばり（4月中旬ころ）

順位の一番高いオスが気に入った場所（多くは山頂に近いところ）をなわばりにします。なわばりの大きさはその地形にもよりますが、直径200～400mの円と考えてください。なわばりを決めたオスは、自分のなわばりに他のオスが入ってこないように巡回をします。このオスのとなりに2番目の順位のオスがなわばりを作り、次々となわばりが決まってきます。

⑥つがいとあぶれ

なわばりができたオスは、そのなわばり内で生活するメスと行動をともにする時間が長くなります。相手は必ずしも特定のメスとは限らないようですが、メスの行動範囲が限られてくると、なわばりごとのオスとメスの組み合わせが決まってきます。

だんだん、なわばりが決まって、オスとメスのカップルができてくると、順番が最後の方になったオスは結婚ができなくなります。これはオスとメスの数が

平成15年4月10日撮影

平成15年6月22日撮影

いずれも蓮華岳を上空より撮影

（右）なわばりが形成される4月中旬の稜線は、吹きさらしの場所を除き一面が雪でおおわれていて、ハイマツや高山植物がどのようになっているのかわかりません。

（左）産卵やヒナを育てるのに大切な6月から7月は、雪が融け、ライチョウが生活しやすい環境になります。

なわばりが決まるころと、産卵のころとでは、雪解けにより環境が著しく変化しています。このことから雪解けの進行状況が巣の位置の決定にも影響があるとも思われます。

ライチョウはこの急激な変化を踏まえた上で、なわばりを決めているのでしょうか。とても不思議です。

なわばりを主張して鳴くオス(※)

1対1ではなく、オスの方が約1.5倍多いので、どうしてもあぶれてしまいます。

このオスはなわばりを持っているオスにいどみ、なわばりとメスを手に入れようとしますが、いつも負けてしまいます。

⑦結婚生活（5月上旬）

安定したオスとメスの生活に入り、エサを食べ、ゆっくり休む日課が続きます。

時々あぶれのオスがちょっかいを出しに来ますが、見張りをしていたオスが目ざとく見つけ追い払い、メスがなわばり内のどこにいようとオスは確実にメスの近くに寄り添います。

⑧交尾

オスに見られる求愛を示す行動は尾羽を立てて広げ、つばさ（風切羽根）を少し広げてメスの周りを回ります。

求愛するオス(下)(※)

つがいのライチョウ(手前がメス)(※)

メスは受け入れ準備ができていないときは無視をし、受け入れが可能なときは頭をさげます。交尾は産卵中でも見られます。

⑨巣づくり

特別な巣づくりはしません。ハイマツなどの地面のくぼ地を利用して、体が沈む程度の穴に産卵します。

最初の卵を産んだ後、クチバシで近くの枯葉などを引き寄せて、卵の上におおいかぶせ、その場を立ち去ります。

次の産卵の前に最初の卵を葉の上にクチバシで持ち上げてから座り込んで産卵します。

最後の卵を産み終えた時に巣ができあがります。

⑩産卵（6月上旬～）

1日おきくらいに産卵し、6～8個の卵を産みます。最後の卵の色は少し濃い色をしています。

⑪抱卵（6月中旬～）

卵を抱くのはメス親です。1日に2～3回、食事とフンをするため巣を離れます。メスはせわしくエサを食べます。

このときのフンは通常のフンより大きく、メスが近くで卵を抱いている目安になります。オスはなわばりを守っています。

巣(中央に6個の卵)

⑫孵化（7月上旬）

生まれたばかりのヒナはぬれていて立つことができませんが、数時間もすると羽根が乾き、自分の足で歩くことができるようになります。

なわばりを守り続けてきたオスは、ヒナが誕生するとなわばりに対する意識がうすれ、しだいになわばりがなくなっていきます。

オスは単独で生活したり、群れを組んだり、あるいはメスとヒナに合流したりします。

⑬ヒナが育つ

孵化して数時間後にはヒナはメス親の後について巣を離れ、自分でエサとなる高山植物をつつくようになります。

ヒナは体が小さく、まだ自分の体温を保つことができないので、時々メス親の腹の下に入って体を温まります。

オスはヒナを育てることはしません。

一ヶ月ほどしたヒナは、自分の体温を保てるようになりますが、まだ、メス親と一緒に生活しています。

砂あびをする1ヵ月すぎのヒナとメス親

孵化後1週間のヒナとメス親

⑭冬を越す準備（10月～）

ヒナは親鳥と同じ大きさの体になります。

単独、ファミリー、オス同士などの群れで生活します。

オスの群(※)

ライチョウの特徴

①どこにいるの？

北アルプス（雪倉岳・剣岳～穂高岳・乗鞍岳・御岳）、南アルプス（駒ケ岳～イザルヶ岳）、頚城山系の火打岳に分布しています。ライチョウは格好の良い飛び方はしませんが、飛んで移動しますので、上記以外の場所でも時々姿を現すことがあります。

通常は上記の場所の２４００ｍ以上に巣を作り、繁殖をします。

②体つきは？

大きさはハトより少し大きく（体重は４５０ｇ～５００ｇ）、オスもメスも同じくらいの大きさです。

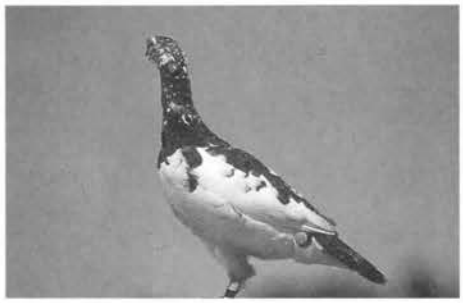
夏のオスは黒褐色、メスは茶褐色、冬はオスもメスも白色です。ただし、クチバシから目にかけてオスは通年黒色です。

③ライチョウならではの特徴は？

足の爪の生えぎわまで羽が生えています。

夏と冬とで、羽の色が変わります。このことを換羽といい、日照時間と関係があります。日がだんだん長くなる３月ころから白い羽が抜けて夏の黒褐色の羽が生えてきます。一気に抜け替わると丸裸になってしまうので、二ヶ月くらいかけて徐々に変化します。

白色のライチョウ(オス)(※)


黒褐色のライチョウ(オス)(※)

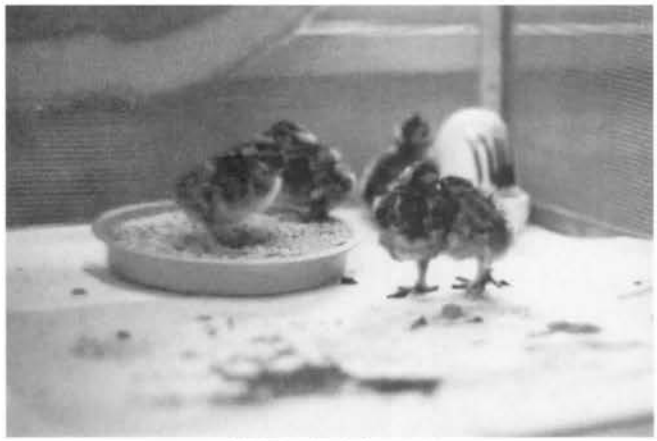
ライチョウの飼育

①孵卵器による孵化

定温の容器に卵をいれて温めます。温度は37.8度、湿度は70～80％を保ち、孵化の後半は80％以上にします。

卵は同じ面をいつも上に向けておくと、発生が中止することもありますので、一定時間ごとに傾きを変えます。

孵卵器の中の卵


育雛器で飼育中のヒナ

②育雛器による育雛

親の腹下と同じような環境とエサを食べたり運動したりする環境を持ち合わせた道具で育てます。ライチョウのヒナは動きが非常に活発で、育雛器のヒーターと天井の間に入り込むことなどがあり、ニワトリ用の育雛器に改良を加えたり、特注で製作したりしました。

30日もすると育雛器では手狭になるため、床で飼育します。このころになると温めてやらなくても生活できるようになります。

（以上、展示解説文を改変）

（市立大町山岳博物館　副館長　宮野典夫）

（写真提供　※印は平瀬貴志氏）

飼育下でメス親がヒナを育てている

山と博物館　第51巻　第9号
二〇〇六年九月二十五日発行
発行　〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一―二二―〇二一一
FAX　〇二六一―二一―二二三三
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
印刷　㈱奥村印刷
定価　年額一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三三九三

R100 PRINTED WITH SOY INK この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。